

二木会・「勉強会」レジュメ

米国女性との国際結婚第1号だった上田藩主の弟・松平忠厚

(レポーター・宮原安春)

(1) なぜ、インターマリッジ（国際結婚）を特殊な視線で見るとか

日本人は島国なので異質なものを排斥または特殊な目で見るとある。このため、幕末には外国人を「夷狄」（鳥や獣に等しく卑しい人間）と拒み、戦前にも「鬼畜米英」という言葉が叫ばれた。「毛唐」「南蛮」も差別後である。その偏見が底流に流れていたため国際結婚にも、反対が多かった。最近、自分の息子、娘が外国人と結婚する例が多くなってきた。ここで、国際結婚について改めて考える。なお、英語では「intermarriage」または「mixed marriage」という。日系カナダ人のインターマリッジは95%である。

ついでに言えば、国際結婚で生まれた子供を「あいの子」「混血児」「ハーフ」という言葉は最近、差別語としてマスコミでは使われない。

(2) 最初の「雑婚」は、明治6年（1873年）

明治6年、太政官布告第103号によって、外国人との結婚は日本政府に届けること、外国人の妻は日本国籍になる、日本人の婿養子になる時も日本国籍になると定められた。このため、「内外人民結婚雑件」として、外国人との結婚、離婚の届け出記録は外交史料館に保存されている。(のちに結婚した人が自国籍を失うことで外国から反発。また、国によって結婚、離婚の法的な意味合いが違う。)

「雑婚」第1号は明治6年に英国女性と結婚した南貞助。

(3) 実際には、英国の法律で、明治2年（1869年）に英国女性バサイアと結婚した尾崎三良（さぶろう）が正式な結婚第1号。これは秘匿されて、日本政府には明治13年に届け出。⇒このドラマは宮原著「リゾート軽井沢の品格」所収。

(4) 米国女性と結婚した第1号は、上田藩主の弟・松平忠厚。

これまで、米国女性と結婚した第1号は新渡戸稲造とメリー・エルキントンだと思われていた（明治23年、結婚）。

だが、実際の第1号は、松平忠厚とカーリー・サンプソンが1879年（明治12年）にニューヨークで結婚した。カーリーは、ニュージャージー州にあるラトガーズ大前にある本屋の娘。松平忠厚はラトガーズ大を卒業して、建築会社の測量技師となっていた。

この結婚は日本政府に届けが出されなかった。

では、松平忠厚とは何者か。最後の上田藩主（5万3000石）・松平忠礼（ただなり）の異母弟で、上田藩の飛び領地、更級郡塩崎村（5000石）（現在・長野市）の領主であった。塩崎に親が決めた妻と一児を置いて米国留学していた。

(5) 忠厚はいつ、渡米したのか。

安政6年（1859年）に上田藩主・松平忠優（ただます）が死去したので、忠礼が9歳で七代目藩主に。だが、1868年の明治維新前に、上田藩は明治政府側につき、北越戦争、会津戦争に出兵。明治2年に忠礼は上田藩知事に。だが、廃藩置県で明治4年に

その地位を失う。

明治5年(1872年)、異母弟の松平忠厚と渡米。このとき、忠礼、23歳、忠厚、21歳。私費留学生としてラトガーズ大に入学。

ラトガーズ大は、越前藩主・松平春嶽による藩派遣の学生・日下部太郎が留学していたので、教授のウィリアム・グリフィスが親しくなり、越前藩が御雇教師としてグリフィスを雇った。廃藩置県で越前藩がなくなり福井県になると、グリフィスは明治5年に大学南校(東京大の前身)に移り、明治7年まで物理、化学、精神科学などを教えた。彼との関係で、明治初年に渡米した学生の多くはラトガーズ大に入学した。松平兄弟が留学した当時には同大には20人ほどの日本人学生がいた。

(⇒比較・英国留学生はケンブリッジ大が多かった)

兄の忠礼は、1879年(明治12年)に帰国。外務省御用掛、宮内省式部官に勤務。明治17年の華族令で子爵になる。1895年(明治28年)、46歳で死去。

弟の忠厚は、そのとき帰らず、カリーと結婚。忠厚、28歳、カリー、19歳だった。

(6) ブルックリン・ブリッジを造り、大西部時代に鉄道建設

忠厚は、マンハッタン高架鉄道会社に、シビルエンジニア(土木工学技師)として入社。折から、マンハッタンとブルックリンを結ぶブルックリン・ブリッジの建設が着工していて、忠厚は8thアベニューの延長と1stアベニューと2ndアベニューからイースト・サイドまでの設計を任された。また、測量のアシスタント・エンジニアも担当。三角測量の器具を考案して、当時のニューヨークの新聞に大きく取り上げられた。

この時期に、忠厚は、塩崎に置いてきた妻との離婚を兄に申し出た。塩崎では「殿様がけがらわしい毛唐女とできてしまった」と憤慨して、即離婚を認めて、別の男と養子縁組した。兄は弟を松平家から勘当する形で世間体を保った。

(このため、日本の公的記録から忠厚の米女性との結婚は欠落したらしい)

忠厚はその後、ユニオン・パシフィック鉄道に測量士として転職。「大西部時代」に、ネブラスカ州オマハから太平洋岸のオレゴンまで鉄道を敷設した。さらにペンシルバニア州ブラッドフォード市、コロラド州の測量技師、鉱山技師になる(まだゴールドラッシュの時代)。太郎、欽次郎、フミエ(幼時に死去)の子どもが生まれている。

だが、1888年、結核でコロラド州デンバーで死去。享年、37歳。

没後百年目の1988年に、日系アメリカ人によって、デンバーに記念碑が建立された。同年、四代末裔の親族であるベティ・松平・リードが上田を訪問した。

(参考資料、「黄金のくさび」飯沼信子・郷土出版社

「野口英世とメリー・ダージス」飯沼信子・水曜社

「トミーという日本人」金井園・文一総合出版

「国際結婚第一号」小山騰・講談社

「破天荒<明治留学生>列伝」小山騰・講談社

「軽井沢物語」宮原安春・講談社)